

## ドイツ軍ミリタリーウェアの持つ機能性及びデザイン Functions and Designs of the Deutsches Heer's Militarywear

Bunka Fashion Graduate University  
Chiyori Kawada  
Toshiko Kato  
Minoru Abe

文化ファッション大学院大学  
助手 川田 知依  
准教授 加藤 登志子  
教授 阿部 稔

### 要旨

ミリタリーウェアとは軍用の制服のことであり、一般的に陸軍の軍服を指している。現在ではコレクションブランドからファストファッションに至るまで、軍服風のデザインを取り入れたファッション、いわゆるミリタリー룩を多く発表しており、性別を超え、ファッションの定番として広く定着していると考えられている。本研究では、この認識のもとミリタリーウェアの魅力をさまざまな方面から探り、第二次世界大戦に、ドイツ陸軍で着用されていた 1936 年型野戦服「M36」を通してミリタリーウェアの時代的変遷、機能性、デザイン性を研究、現代に適したミリタリー調のレディースウェアを提案し、制作を行う。

### 1. はじめに

日本では軍服と言えば、アメリカ軍のミリタリーウェアやフライトジャケットがポピュラーである。そのレプリカ、古着、軍服風のデザインを取り入れたものは市場で多く流通しており、アメリカンカジュアルの一部として浸透している。一方、ヨーロッパにも魅力を感じるミリタリーウェアは多く存在し、そのテイストはレディースウェアとしても表現されている。近代ファッション史の中でミリタリー룩は流行を繰り返し、ファッションの定番として広く定着している。2013 年 S/S プレタポルテコレクション期間中にヨウジヤマモト (YOHJI YAMAMOTO) は自身の新ラインとして「REGULATION (レギュレーション) <sup>1)</sup>」を

デビューさせた。そのコレクションを図 1 に示す。デザイナーの山本耀司氏によると「制服」をテーマに、“規律をもった服”を提案、昔から制服という様式のあり方を常にこだわり続けてきたと言っている。

本研究では、ヨーロッパの中でもとりわけ堅固な印象を持つドイツ軍に着目。第二次世界大戦中に着用されていた 1936 年型野戦服「M36」を中心に、制服的要素が強いイメージを持つドイツ軍のミリタリーウェアの魅力に迫る。また、第一次世界大戦から改良された軍服の機能性とデザインを研究し、レディースウェアを制作。その制作によりミリタリーウェアとレディースウェアの考察を行う。

提出年月日：2012 年 12 月 15 日

受理年月日：2013 年 1 月 21 日



図 1. REGULATION 2013S/S

## 2. 野戦服の概要

野戦服とは、陸軍が戦闘時に着用する軍服のことを指す。通常は戦闘服としてまとめられるが、国、軍種によって様々なスタイルが存在している。また、当時は通常の勤務服と戦場で着用する野戦服を特別区別していなかったが、野戦時では周囲の風景に溶け込むためだけではなく衛生的問題もあり、次第に区別することになった。さらに動きやすさ、体温保持、装備品の装着などが重要視される。

## 3. ドイツ軍の歴史

第二次世界大戦におけるドイツ軍の動きを表 1 に示す。

ドイツ軍は、1935 年頃より M36 を基本スタイルとして着用した。(それ以前は M35 を着用) 当初のスタイルから改造や改良を加えられ、1939 年頃より始まった第二次世界大戦では M36 のさまざまなスタイルが混同するようになる。1940 年までドイツ軍は各国に侵攻を続け、さらに 1941 年にはソ連領へ侵攻を開始。(＝バルバロッサ作戦) 夏・秋と快進撃を続け、首都モスクワ目前まで迫ったが、冬の到来が例年より早かったことも影響して進軍は停止。特別な防寒着を用意していなかったドイツ軍は、ロシアの厳寒に対応できず、戦闘による欠落より凍傷や疾患で欠落する兵士の方が多い始末となる。この事からドイツ軍は 1942 年以降冬の防寒着や防寒具の開発を本格的に行った。

表 1. 第二次世界大戦におけるドイツ軍の動き（東部戦線）1939

西暦	
1939年9月1日	ドイツ軍 ポーランドへ侵攻
1940年5月10日	ドイツ軍 ヨーロッパ西部へ侵攻
1940年6月14日	ドイツ軍 パリを占領し、フランスを降伏させる
1940年8月1日	ドイツ空軍の爆撃機・戦闘機がイギリス本土を空爆。＝バトル・オブ・ブテリン イギリス空軍戦闘機隊と激しい空中戦。
1940年9月1日	イギリス本土上陸作戦・中止
1941年6月22日	ドイツ軍 ソ連領へ侵攻＝バルバロッサ作戦 独ソ不可侵条約を破棄し、約300万の軍でソ連へ侵入。独ソ戦の始まり
1941年12月5日	ソ連軍は反撃を開始。ドイツ軍は開戦以来かつてない深刻な敗北
1942年5月1日	ドイツ軍 南部のハリコフ東方で攻撃を再開
1942年中盤まで	ヨーロッパの大半及び北アフリカの一部を占領。 大西洋ではドイツ海軍の潜水艦・Uボートが連合軍の輸送船団を攻撃。 圧倒的に優勢を維持。
1943年2月2日	総攻撃を開始したソ連軍に包囲されたドイツ第6軍は、10万近い捕虜を出し、降伏
1943年7月5日	史上最大の戦車同士の戦闘＝クルクスの戦い ドイツ軍はソ連軍の防衛線を突破できず、予備兵力の大半を使い果たし敗北。
1943年9月8日	ドイツ軍 ローマを占領
1944年7月25日	ドイツ軍 コブラ作戦にて壊滅的狀態
1945年4月25日	ドイツ軍の降伏
1945年5月8日	降伏文書批准式

出典：『パンツァー・ユニフォーム』などをもとに表を作成

4. ドイツ軍の野戦服＜種類・階級・兵科色＞

4-1 支給野戦服

ドイツ軍の野戦服は、ナチ党政権の誕生以来、様々な改良を重ねられた結果、M36 が制定される。当初はフィールドグレー色を基調とした軍服であり、襟と肩章部分のみダークグリーン色が用いられた。戦争が長期化するにつれ、野戦服の生産工程の簡略化が求められ、1940 年には襟と肩章部分も衣服と同様フィールドグレーを使用した。(=以降 M40 と呼ぶ) ウール不足は深刻化し、1943 年～1944 年頃になるとウール 100%からレーヨンの混紡率が高いものが増え、保温機能が悪化する。素材の変化により、色味は青味がかかったものから茶色味が強くなり、1944 年頃のものではフェルトグラウ色と呼ばれた。

4-2 将校野戦服

将校は支給品の M36 野戦服のような制服を自ら仕立てて着用する事が基本であった。通常の M36 と異なる規格は、袖口の折りカフス・高い襟・ベルトを止めるフックがない、などがあげられる。袖口の折りカフスは第 3 のポケットと呼ばれた。素材は支給軍服より質の良い物が使用されていることが多く、ドスキン(=ラシヤ地)で仕立てるものが多かった。しかし、激しい野戦での消耗をさけるために、戦闘に繰り出

す際には将校も支給軍服の野戦服を着用するのが一般的であった。また、オーダーメイド仕様の将校服は下衣にフィールドグレーのシャツの着用をしている時のみ襟の開閉を許可されていたが、戦況悪化の影響を受け、異なる下衣でも襟の開閉が許可されるようになった。

4-3 将官野戦服

将校の中でも高級感を漂わせる将官の軍服は、肩章・襟章・軍帽・ボタンなど、さまざまな部位に金色を使用したアクセントが用いられた。

4-4 階級区別

階級区別を表 2 に示す。階級は主に襟章・肩章・鷲章で見分けられた。階級名称は約 300 存在した。

4-5 兵科色

色で見分けられた所属区別ごとの兵科色を表 3 に示す。兵科とは、狭義には、陸軍・海軍軍人に割り当てられた職務区分のうち、主に直接的な戦闘を担当する職務区分を表す。

表 3. 兵科色

ホワイ	歩兵
ピンク	装甲・対戦車
ブライトレッド	砲兵
カーマインレッド	参謀将校
ダークレッド	獣医
オレンジ	憲兵
ゴールド・デンイエロー	騎兵
レモンイエロー	通信
ダークグリーン	装甲擡弾兵
ライトグリーン	山岳擡弾兵
ダークグリーン	陸軍行政官
ライトブルー	輸送部隊
コーンフラワーブルー	医療
バイオレット	従軍司祭
ライトグレー	宣伝部隊
ブラック	工兵

※将官は兵科色での判別はなかった

表 2. 階級区別

	上級将校（将官）	中級・下級将校（大佐～少佐）	下士官	兵士	備考	時代による変化
鷲章	金モール	銀モール	白・グレー		1934年2月25日以降より右胸や軍帽のトップに張り付ける。 ダークグリーンの台布上に刺繍。	ダークグリーンの台布からフィールドグレーの台布へ変化。 刺繍から染め付けに変化。 鷲の形から三角形に変化。
襟章	赤地×金モール ＝ラーリッシュ・シュ ディッケライ (またはアラベスク)	ダークグリーン地×銀モールの2本の平行線 ＝ドッペルリツェン (1本はリツェと呼ぶ)	シルバーグレー 機械織 襟周りに白色縁取り ＝トレッセ	シルバーグレー 機械織	所属する国籍を識別する重要な要素であり、また、階級章の機能を持つ場合と、士官の地位や権威を表象する機能を持つ。 将官の襟章は赤、金等の鮮やかな色が用いられた装飾性の高いデザインである場合が多い。	平行四辺形から長方形に変化。 ＝折襟から開襟ネクタイ式への変更に対応したため
肩章	縁取りを兵科色で彩られた				細かい階級は肩章の上に付けられた星（＝シュテルン）の数で判別する。 大佐2つ・中佐1つ・少佐/兵士0	

出典：『第2次大戦ドイツ軍装ガイド』などをもとに表を作成

## 5. 「M36」

### 5-1 「M36」色とその目的

36 年型野戦服の定番のスタイルは、ジャケット・パンツ・オーバーコートが使用され、基本的には下士官・兵士・将校、共に同型のスタイルを着用していた。その中で、規定から外れない程度に丈の改造や修正を行う兵士が多かった。従って階級は鷲章・襟章・肩章で示され、また兵科色によってどこに属しているのかを判断することができた。M36 の特徴としてあげられるのはその色である。フィールドグレーにダークグリーンの襟。年を重ねるにつれ、襟・肩章もフィールドグレーに変化し、同色に統一した。第二鉄十字章授与式時の様子を図 2 に示す。この時代になるとフェルトグラウ色が多く使用されており、左より 3 番目の兵士はダークグリーンもしくは黒色の肩章を付けていることが解る。なぜ M36 にはフィールドグレーを使用しているのか。1934 年頃（第一次世界大戦時）では高品質の黒いウールを素材とし、上襟・襟章にはローズピンクの縁取りがされていた。しかし、黒い戦闘服は偵察する際にあまりにも目立ちすぎたため、周囲の土色にうまく溶け込むようにと、色の変化が求められた。

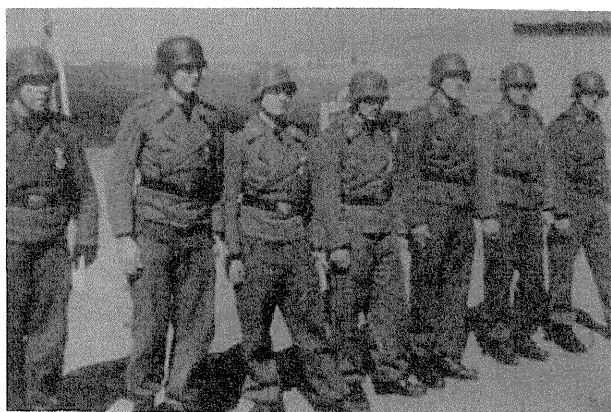


図 2. M36 を着用したドイツ軍兵士 (1944)

## 5-2 軍隊基本動作

衣服制作にあたり、陸軍隊の基本的動作はその機能性を裏付けるであろうと考え、動作ごとに分類をした。

### ① 気を付け：不動の姿勢。

「気を付け」は Stillgeschanden (シュティルゲシュタンデン) の号令によりかけられ、銃の真横から指 4 本を揃えて挟み込むようにつかむ。実質的には銃を支えているのは親指と人差し指のみ。後の指は力をいれず、関節を曲げないように注意してぴんと伸ばす。左手は手のひらを腰骨にあて、中指がズボンの縫い目に合うように添える。このとき、肘が窮屈な状態になる。脇を閉める。足は踵を揃えてつま先の角度が 45 度になるように行う。

### ② 休め：不動の姿勢を解く。

「休め」は Rührt euch (リュート オイヒ) 号令にて左手を伸ばし、左足を半歩左斜め前に踏み出す。右手と右足は気を付けのままの状態。

ドイツ軍の基本動作は他国と異なり、左右での動作が異なるのが特徴。また、「回れ右」ではなく、「回れ左」となる。

### ③ その他：銃を構える姿勢

立て銃・下げ銃・担え銃・控え銃・捧げ銃・銃を置き・銃をとれ・着け剣・取れ剣・銃点検・元へ銃

※戦争により、使用する銃の長さが異なるため、動作も異なる。また、野戦よりも身近な戦争が多かったため、短い小銃を使用することの方が多かった。そのことは過去の写真からも銃を構えている姿はなかなか見受けられなかった。

以上の内容を考慮し、静止状態でも袖の厚みを感じることなく美しさを保ち、なおかつ袖下には銃を構える際に必要な前傾姿勢の運動分量を取り入れるためマチをはめ込み、機能とデザインの両立を試みることにする。

## 6. M36 ジャケットのデザイン

### 6-1 前デザインの仕様

前デザインの仕様を図 3 に示す。襟はダークグリーン色、身頃はフィールドグレー色が使用されている。肩章は白でパイピングされていることから陸軍のものだということがわかる。また、腰・胸ポケットにはプリーツがついている。前ボタンは 5 つ（～1940 年頃まで）付き、本来は第二ボタンのホールには図 4 で示した二級鉄十字章<sup>2)</sup>が吊るされている。これはドイツで制定された軍事功労賞である鉄十字章の最下級の勲章である。第二次世界大戦をきっかけに 1939 年に再度制定された章は赤・白・黒の三色のリボンが付けられる。図 3 は十字章が外された略装地のものである。

### 6-2 後ろデザインの仕様

後ろデザインの仕様を図 5 に示す。後ろ中心に接ぎはなく、ウェスト位置でタックがたたまれている。センターベントは裏地で強度が保たれている。また、肩から肩甲骨を通り、ウェスト辺りまで内蔵サスペンダーがステッチで止めつけてある。袖裏のない仕様の為、アームホールには見返しが付き、その見返しもステッチで止めつけられている。

### 6-3 裏地仕様

裏地の仕様を図 6 に示す。裏地には綿が使用され、計 4 本の内蔵サスペンダー（トラーゲグルテ）が肩から裏地の内側を通り、取り付けられている。また、裏地の長さは腰までで短く設定され、袖裏はついていない。右前端内側には包帯用ポケットが付けられ、1937 年よりポケット口にボタンが付けられるようになる。細腹から前身頃にかけてウェストを調節する紐（ドローコード）がついていたが、1936 年より廃止になっている。

以上のことから、この M36 ジャケットは 1939 年頃のものであることがわかる。



図 3. 前デザイン

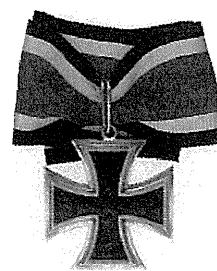


図 4. 二級鉄十字章



図 5. 後ろデザイン

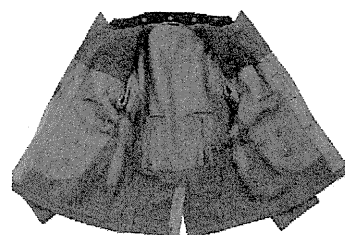





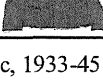


図 6. 裏地デザイン

### 6-4 特徴的な部位

M36 ジャケットの細部の各部位を表 4 に示す。上身頃 5 ヶ所（肩・襟・袖・胸・第二ボタン位置）で階級が表記され、着用していれば一目で階級がわかるようになっている。また、表 4-9 番に示すコットンを使用した裏地の仕様も特徴的である。ベント上のウェスト位置に短く設定された裏地は内蔵サスペンダーを通す箇所以外のベント・ベルトフック付け位置・内蔵サスペンダー付け位置が表地に直接ステッチで止めつけられている。表地より明るい色の裏地と同色の糸を使用しているため表からはステッチの位置がはっきりとわかる。

表 4. M36 ジャケットの特徴的な部位

	名称	用途・備考	写真
1	肩章	縁取りで兵科を分け、階級表記	
2	襟章	階級表記	
3	袖章	階級表記	
4	内蔵サスペンダー (トラージェグルテ)	装備の重量分散	
5	ベルト用フック穴 (ザイテンハーケン)	内蔵サスペンダーに使用	
6	包帯ポケット	右前端内側ポケットに包帯を収納	
7	腰ポケット	プリーツが付いたポケットが 上下・左右に4つ	
8	ベント	コットンの裏地で補強	
9	コットンライナー(裏地)	ベントより上の位置で裏地は 表地に縫い付けられている	
10	ボタン(5つ)	のちに素材が変更し、強度確保 のために6つに変更になる	

出典：『Feldbluse : the German soldier's field tunic, 1933-45』  
などをもとに表を作成

## 6-5 各部位の機能

### 1) 襟

初期では単なる飾りでしかなかった下襟に機能が求められるようになる。胸の前で重ね合わせられるほどの幅に広げられ、首と肩で固定することで、装甲車内の油や日常の汚れからのストレスを軽減した。さらに寒さをしのぐ目的として用いられるようになる。下襟の変化と共に上襟の幅と襟先の角度にも改良があり、それに合せて襟章の角度も変化した。これは、見る側から襟章が垂直に見えるようにしたと考えられる。

### 2) 袖

袖幅を広く取ることで、セットインスリーブの動作分量にゆとりが加えられている。銃を構えるなど、前動作を重要視したためか、過去資料写真からは後腋点辺りに多めに分量が加えられている

ように見える。しかし、様々な装備を着用する際には生地は硬く、また分量も多いため、着苦しさがあったと考えられる。

### 3) ウェストベルト穴・フック

軍装備用のベルトを身頃に固定させるためのフック。さまざまな装備が収納されるため、かなりの重さがあったことが考えられる。

### 4) 内蔵サスペンダー

トラージェグルテと呼ばれる内蔵サスペンダーは、ジャケットのみに使用されていた。厚手のコットンのベルト状の物で、肩に取り付けられる中央部は強度をもたせるために巾が広く（約 44 mm）、厚みがある。服自体には負担をかけずに、肩から装備を背負う仕組みになっている。

### 5) ポケット

上下左右のフラップ付きのジャケットのポケットはタックプリーツが付く。（M43 では 1943 年以降には廃止される）

### 6) 裏地素材

初期頃より、ライトグレー色の綿または綿のヘリンボーンを身頃と袖に使用していた。

襟には、カーキ色の目の詰まったコットン生地または、服地と同素材のウールを使用していた。上襟の裏地に同素材のウールを使用するようになってからも別布にする目的は、生産工程上の分業の為である。そのため、服地と同素材のものでも若干色が異なっているものも多い。

### 7) 表地素材

素材はドスキン（現代でも黒無地の礼装地、学生服など多く用いられている）を使用しているため、決して動きやすいとは言えない硬さがある。高品質なものにはウールが 100% 使用されていたが、省力化が目的で質は低下し、混紡が多くなる。1943 年～1944 年には、спанレーヨンの混紡率が高くなり、保温機能は悪化する。それに伴い、同じフィールドグレーでも年代によって生地色の

微妙な変化が見受けられる。当初のものは青味が強く、混紡率が高い後のものは茶色味が強くなる。身頃に合わせて、ボタンの色も見頃と同系色に変化するのも特徴だ。さらに、戦争の終盤頃になると混紡率関係なく、どのような素材でも使用するようになる。

## 7. M36 オーバーコートのデザイン

### 7-1 前デザインの仕様

前デザインの仕様を図7に示す。襟はダークグリーン色、身頃はフィールドグレー色が使用されている。肩章は白でパイピングされていることから陸軍のものであるということがわかる。前ボタンは左右に6つずつ付き、袖幅は太い。袖口には伸縮不可な深めのフレンチカフがついている。腰ポケット口は広く出し入れしやすい。丈はふくらはぎ辺りまでである。

### 7-2 後ろデザインの仕様

後ろでデザインの仕様を図8に示す。背中心に接ぎがある。腰辺りからは深めのセンターベントがつき、開閉できるようにボタンが取り付けられている。また、ウェスト位置には調整用ハーフベルトがついている。裾の四隅（前端・後ろベント端）には小さいフックがつけられ、尻下辺りに糸ループが縦に並んで2つずつ付き、裾のフックをかけられるようになっている。

### 7-3 裏地仕様

裏地の仕様を図9に示す。裏地には身頃・袖共に綿が使用され、長さは腰までの短さに設定されている。腰ポケット袋布にはマチがある。次に、革で補強された切り込みを図10に示す。これは、ウェスト位置で中のジャケットに取り付けられたベルトフックを通すための切り込みであり、重みに耐えられるように革で補強されている。裏地の袖底にはハンガーフックが2ヶ所取り付けられ、コートの重量を分散することができる。



図7. 前デザイン



図8. 後ろデザイン



図9. 裏地仕様

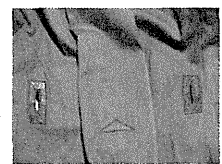
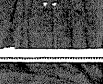



図10. 革で補強された切り込み

### 7-4 特徴的な部位

オーバーコートの細部の各部位を表5に示す。特徴的な点は、表5-1番に示す肩章である。肩章は階級が変化した後変更できるように、下士官・兵用のオーバーコートには簡単に着脱が可能なようにボタンが付いている。このことから、オーバーコートもジャケット同様に同じものを繰り返し着用していたことがわかる。また表5-9番に示すサイズ表記スタンプも特徴的であり、右胸辺りに製造元とサイズがスタンプで明記されている。左上から時計まわりに肩幅・胸囲・首回り寸法・袖丈・着丈の数字が押されている。その下にM36などの製造年とどこに所属していたのかが書かれている。これはレプリカには表記されない。

表 5. オーバーコートの特徴的な部位

	名称	用途・備考	写真
1	肩章	階級表記	
2	ダブル前	身を寒さから守るため	
3	腰ポケット	手袋を着用したままで使用しやすいようにポケット口は大きめ	
4	フレンチカフ	将官が命令書を収納するのに利用	
5	裾のフック	足さばきを良くするために丈の調節	
6	ハーフベルト	ウエスト周りを調節	
7	センターバックベント	腰下の深いベントは裾のフックで丈を調節する際に大きくめくれるようになっている	
8	コットンライナー(裏地)	ベントより上の位置から袖裏まで	
9	サイズ表記スタンプ	製造元とサイズがスタンプにて表記されていた	
10	ハンガーフック	コートの重量分散のため、袖下からハンガーフックが付けられている	
11	ボタン(6つ×2列)	身を寒さから守るため	

出典：『東部戦線の泥沼日記～WW2Military Collection～』  
などをもとに表を作成

<http://gerhard03.blog61.fc2.com/>

## 7-5 各部位の機能

### 1) 襟

オーバーコート全体もフィールドグレーで統一されるようになり、1941年～1942年にかけては厳寒の経験から襟を大きくした。その襟を立てることで顔の下半分と首全体を覆い隠し、体温の維持ができるようになった。

### 2) センターベント

元々は動きやすいように背中にプリーツを入れていたが、さらに動きやすいようにセンターベント（切り込み式）に変化。必要ならボタンで留めることができる仕様になっている。野戦服は後ろ

身頃が1枚布で裁断されているため、ベント部分には布を付け足している。深めに設定されたベントの裾四隅にはフックが取り付けられ、丈の長い裾を短くたくし上げられようになっており、足さばきを良くすることが出来た。

### 3) 袖

袖口には伸縮不可な深い折り返しのフレンチカフが付き、将官が第3のポケットとして命令書などを収納するために使用していた。

### 4) ウェストベルト穴・フック

中に着用しているジャケットのベルトを固定するためのフックをコートの外側へ出し、ジャケットからコートを通して装備用ベルトを固定した。

### 6) ポケット

オーバーコートの腰ポケットでは、間口を斜めに大きく取ることで、厳寒の中でも手袋をしたままポケットの使用を可能にしている。

### 7) 裏地素材

両袖底にはハンガーフック用のループが2ヶ所ついており、コートの重量を分散していた。現在アウターに多く見られる襟吊りは見られなかった。

### 8) 表地素材

ジャケットと同様に時代が進むにつれ使用素材は混紡へと変化していった。保温効果を保つため、素材変化の代わりに左前、右前のどちらにも合わせることができ、強風の時など、前が両前（二重）になっているため寒をしのぎ、また、風向きによって釦を左右に取替えることで風よけとして着用していた。

## 8. M36からのデザイン提案

M36時代の野戦服より、レディスウェアのデザインを提案し、図10・11にデザイン画を示す。制作アイテムは、当時のジャケットとオーバーコートの基本的動作と機能を考察した結果、オーバーコートに決定した。袖は静止状態でもたつきが



なく、腕をおろしたフォルムをそのまま維持できるセットインスリーブに、さらに銃を構えた際に必要な腕の動作分量を袖下にマチを入れる事で機能性を向上させた。また、レディスウェアにおいて重要であるウエストの絞りの位置と丈のバランスは、丈をひざ下に設定することですっきりとしたシルエットになった。また、当時の階級評価であった肩章は肩幅が広くみえるため、肩章をイメージしたエポーレットスリーブにすることで、広く見えないように考慮した。肩パットも使用しなかった。



図 10. デザイン画（製品図）

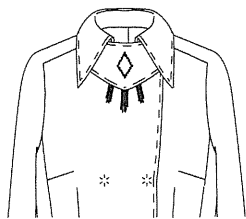


図 11. 閉襟時／チンフラップデザイン

### 8-1 使用素材

#### ① 表地素材：サキシニーミルド

ドイツ、サキシニー地方の優良なメリノ羊毛（サキシニー羊毛）、2/2 の綾組織を 20～25% 縮絨し織目を密にして、毛羽で表面を完全に覆う。弾力性があり手触りが柔らかく、風合いはメルトンとフランネルの中間的なものを指す。

（※当時使用されていたドスキンは目がつまり、硬さがあるためレディスウェアにはあまり向いていないと思われるため、比較的柔らかい wool100% の素材を選定）また、毛羽が短く光沢を感じるものを選抜し、女性らしさを強調した。

#### ② 裏地素材：綿ヘリンボーン

現在は需要が少なくなったためかあまり市場には売られていない。綿素材の為肌触りは柔らかく、温かみもある。またヘリンボーンの為、強度がある。

#### ③ 袖裏素材：ポリエステル

滑りの良い裏地素材を使用する。袖裏にはある程度の強度が必要とされるため、繊維の細かいベンベルグではなくポリエステルを使用した。

### 8-2 ディテール

M36 型野戦服を参考に、台襟の高い襟・大きめのポケット口・深めのセンターベント・内蔵サスペンダーに着目し、オーバーコートのデザインを考案した。

## 9. 制作品

9-1 制作品を以下の図 12・13 に示す。



図 12. 前デザイン



図 13. 後ろデザイン

## 9-2 裏地仕様

裏地の仕様を図 14 に示す。図 9 に示したオリジナルの仕様を参考に制作した。素材は温かく、強度のある綿のヘリンボーン素材を使用した。裏地の丈についても綿というすべらない素材の性質上、着心地を考えて腰までの短い丈に設定した。また、腰まわりの厚みによるごわつきを避けるため、袋布底部分にマチは入れない仕様にした。

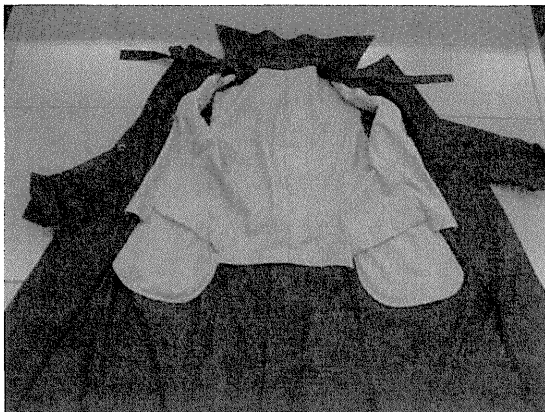


図 14. 裏地仕様と内蔵サスペンダー

## 9-3 各部位の機能

### 1) 襟

台襟の高さを高くすることで、襟を立てなくても寒さを回避することが可能である。また襟を立てないデザインの維持を目的とした。また、襟を固定するためのチンフラップは完全取り外しが可能なコート用ネックレスという発想で制作。図 15・16 に示す。使用しない時は後ろに回してスカーフ風にすることが可能である。

### 2) センターベント

腰下から裾まで距離の長いセンターベントを図 18 に示す。インパーテッドプリーツの変形にすることで、日常動作のゆとりを確保し、さらにボタンを開閉することで稼動範囲の調節が可能になる。ボタンは見えない仕立てにする。また、レディスウェアのため明きは右上に設定した。

### 3) 袖

袖パターンでは、袖下部分に約 10cm のマチを

入れ、袖幅を太くせずに運動量を確保したことを図 17 に示す。当時の銃を構える、敬礼をする、という 2 点の動作を意識して、運動量を確保した。また、袖口には深いスリットを入れ、折り上げてフレンチカフに見立てた。袖丈を短く見せることで手首を出し、より女性らしさを強調させる目的もある。

### 4) 内蔵サスペンダー

内蔵サスペンダーの使用方法を図 19・20 に示す。前部分のみに肩から内蔵サスペンダーを挟みこむ。前開き部分を止めるためのスナップボタンをサスペンダーに付け替えることで前端のディテールに変化を持たせた。また、ダブル前を開いて着用する際の重なり分量の軽減を目的とした。また、内蔵サスペンダーの本来の目的は、重たい装備の重量を分散するためのものだが、それをレディスウェアに多くみられる“2WAY”（2 通り着ることができる）という概念を活かし、本来の状態から気軽にデザイン変更ができるディテールへと応用させた。

### 5) ポケット

身頃続きの大きなポケットは M36 で使用されていた斜め口のポケットのデザインの応用である。身頃側のポケット口から裾までゆとりを設け、ポケット口にゴムをたたきつけることで女性特有の腰周りの丸みを強調した。前切り替え位置から後ろパネルラインまでの大きなポケット口は M36 同様に手袋をした状態でも使用しやすい設計になっている。



図 15. 閉襟時／チンフラップ

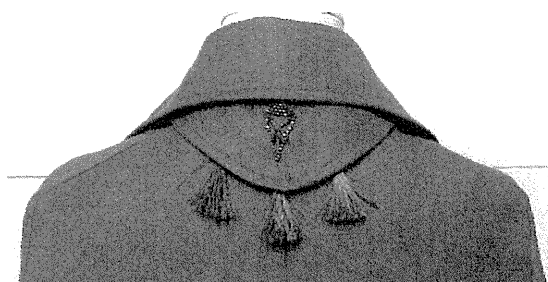


図 16.チンフラップ他用途



図 17.袖下マチ



図 18.センターベント



図 19. 内蔵サスペンダー  
使用時の前デザイン

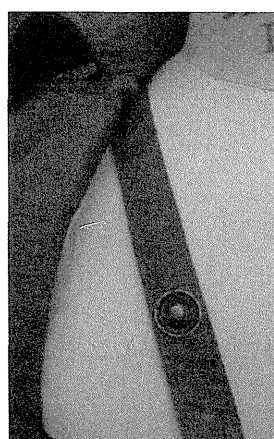


図 20. 内蔵サスペンダー

## 10. まとめ

本研究は、ドイツ軍の軍服デザインを現代のレディースウェアに落とし込むことを目的として、考察し、制作を行った。衣服として最も運動機能性を追求し、現在の衣服の原点であるミリタリーウ

ェアを研究することにより、国、時代ごとに設定された階級や兵科による動作の違いが衣服の機能やデザインにまで反映されていたことがわかった。そこから、力強さや男性らしさといった印象が強いミリタリーウェアをレディースウェアに変更するにあたり、機能性やディテールを取り入れながらもフォルムを柔らかくすることで女性らしさを追求した。また、現代に多くみられるようになった“2WAY”という概念を、当時は機能である内蔵サスペンダーの部分に取り入れることで、よりレディースウェアの着こなしに幅を持たせることができた。女性特有の衣服に対する「ひとつでふたつ楽しめる」という心境は、衣服の企画、制作において重要なポイントであると考えている。制作後、着心地の確認の為実際に着用してみたところ、どちらでの着用しても袖下のマチの量は効果的であり、動作分量を確保するには十分であった。なおかつ、デザインの崩れもなく着用することが可能であった。

## 11. 今後の課題

本研究では、ミリタリーウェアという範囲内で国、時代、服種を絞り、当時の流行や軍服という衣服の研究、考察し、レディースウェアの制作を行った。現代の流れが速く、消費中心の市場に対して、ひとつのデザインに改良を重ね、長い間愛用し着用していたという点は、研究を通して新鮮に映り、現代のファストファッションなどの衣服生産とはかけ離れた世界を感じた。

今後も、機能的かつ着心地の良い衣服に深く着目すると共に、歴史ある衣服からのインスピレーションを感じ、さらにそれを現代に沿ったデザインへ落とし込み、制作を通すことで、衣服と身体の関係性を研究していきたいと考えている。

## 注釈

### 1) 「REGULATION」

Fashion News より引用

<http://www.fashionsnap.com/news/2012-10-01/yohji-regulation/>

### 2) 二級鉄十字章

二級鉄十字章は、騎士鉄十字章を含める鉄十字章の最も下位の戦功章で、最初に貰う事ができる鉄十字章である。(1939 年制定) 終戦までに枢軸軍将兵等を含めると約 300 万個が授与された。

## 参考図書

- 1) Huart, Laurent・Borg, Jean-Philippe・Brown, Lawrence・Charbonnier, Philippe 著 『Feldbluse : the German soldier's field tunic, 1933-45』 Histoire & Collections 出版社
- 2) 菊月俊之 著  
『WWII ドイツ軍ユニフォーム&個人装備マニュアル』 グリーンアロー出版社
- 3) マイケル・H・プルット  
ロバート・J・エドワーズ著／向井祐子訳  
『パンツァー・ユニフォーム：第2次大戦ドイツ機甲部隊の軍装』 大日本絵画
- 4) 山下英一郎 著  
『制服の帝国 ナチス SS の組織と軍装』 彩流社
- 5) ジャン・ド・ラガルド著／後藤修一, 北島護訳  
『第2次大戦ドイツ軍装ガイド』 並木書房
- 6) Davis, Brian L・Michalowsky, Horst 著  
『Uniformen und Abzeichen des deutschen Heeres 1933-1945』 Motorbuch-Verlag
- 7) Beaver, Michael D. 著  
『Uniforms of the Waffen-SS』 Schiffer Publishing
- 8) 菊月俊之著  
『WWII ドイツ軍ユニフォーム&個人装備マニュアル』 アロー出版社
- 9) 山下英一郎著  
『制服の帝国「武装」SS』 新紀元社

## 参考 Web サイト

- 1) 東部戦線の泥沼日記～WW2Military Collection～  
<http://gerhard03.blog61.fc2.com/>
- 2) ウール製野戦服の生地色  
<http://steiner.web.fc2.com/uni/h/h07/h07.html>
- 3) Fashion News  
<http://www.fashionsnap.com/news/2012-10-01/yohji-regulation/>
- 4) M36 野戦服  
<http://tekidanhei.web.fc2.com/m36.html>

## 参考店舗

中田商店

アメ横店 〒110-0005 東京都台東区上野 6-4-10

御徒町店 〒110-0005 東京都台東区上野 6-2-14

<http://www.nakatashoten.com/>

## 図版出展

図 1) Fashion News

<http://www.fashionsnap.com/news/2012-10-01/yohji-regulation/>

表 2) 襟章

ジャン・ド・ラガルド著／後藤修一, 北島護訳  
『第2次大戦ドイツ軍装ガイド』 並木書房

図 2) 兵士写真

マイケル・H・プルット

ロバート・J・エドワーズ著／向井祐子訳

『パンツァー・ユニフォーム：第2次大戦ドイツ機甲部隊の軍装』 大日本絵画

図 3・5) M36 ジャケット

東部戦線の泥沼日記～WW2Military Collection～

<http://gerhard03.blog61.fc2.com/>

図 6・表 4) M36 ジャケット

Huart, Laurent・Borg, Jean-Philippe

Brown, Lawrence・Charbonnier, Philippe 著  
『Feldbluse : the German soldier's field tunic, 1933-45』 Histoire & Collections 出版社

図 7) M36 コート

マイケル・H・プルット

ロバート・J・エドワーズ著／向井祐子訳

『パンツァー・ユニフォーム：第2次大戦ドイツ機甲部隊の軍装』 大日本絵画

図 8・9・10・表 5) M36 コート

東部戦線の泥沼日記～WW2Military Collection～

<http://gerhard03.blog61.fc2.com/>

図 4) 二級鉄十字章

ジャン・ド・ラガルド著／後藤修一, 北島護訳

『第2次大戦ドイツ軍装ガイド』 並木書房

図 12・13・14・15・16・17・18・19・20)

筆者制作作品撮影